

優秀賞『ジュンのための6つの小曲』

佐々木 万里

どんなささいな音もジュンにとっては音楽に変わる。色も温度も匂いも感情さえも、ジュンの手によってクリアに描かれていく。この物語は、音楽家であるジュンの独特な世界に私たちを連れて行ってくれる。そして、ジュン1人の世界から、個性豊かな音楽家たちとの出会いを通して現実と向き合えるように成長していく姿は、力強さも感じる。

題名に6つの小曲とあるように、物語は6つの話から成り立っている。

1つ目の小曲では、ジュンは試合の行われていない野球場で運命的な出会いをする。それは、作曲家を志すトクとの出会いであり、トクの奏でるアコースティックギターとの出会いでもあった。「僕、楽器なんだ！」ジュンはギターの演奏に導かれるように歌った初めての体験からそう気付く。トクも作曲していることを初めてジュンに打ち明け、学校にはない音楽の世界を通して、2人の物語は広がっていく。この小曲は始まりの小曲である。

2つ目の小曲では、ジュライと名付けた自転車が故障し困っている所に、偶然通りかかった親切な男性カンと出会う。実はトクの父親なのだが初めは知らない人だからと怖がっていたジュンも、自転車を乗せて走るトラックの中で、音楽を通じて打ち解ける。そして、カンは反抗期の息子に悩んでいることをジュンに打ち明ける。「カンくんが大事に思ってるって、その子が分かってるといいね」という純粋なジュンの言葉に、心が温くなるのはカンだけではないだろう。

3つ目の小曲では、トランペットを吹くコマリという女の子に出会う。意志の強いコマリは、吹奏楽部顧問の方針が気に食わず、退部届を出そうとしていた。そこに、天才的な指揮者であるイオタが、特別講師として現れる。なぜか楽器として参加することになったジュンはかろうじて歌い終えたが、彼の強烈な指揮をきっかけに歌うことができなくなってしまった。

4つ目の小曲では、ジュンは新たな自分に出会う。歌うのではなく、静寂の中に鳴る音に耳を澄まし、自由に響かせてあげる。ジュンは、歌えなくなった自分を認めることで、また声を取り戻したのである。

5 つ目の小曲では、ついにイオタとジュンが独特な距離感ではあるが互いに理解し合い平穏な時間が流れ始める。しかし、6 つ目の小曲で、ジュンとトクの 2 人に悲劇が降りかかる。それは、同級生からの暴力、学校という小さな世界からの強い差別であった。トクは、傷ついたジュンの姿に音楽で同級生を見返そうと本気で作曲を始める。ジュンは、初めて楽譜と向き合い歌うことを決める。2 人の音楽は同級生たちに届くのか、結末を描く前に物語は終わる。未来に向けて飛躍するように進む 2 人を描いて、読者へとバトンタッチされるのである。

私はこの物語を読んで、まぶしいくらい色鮮やかな世界に驚いた。日常の風景が、夏休みにプールを照らす太陽のように、光って見えるのである。それは、小さい頃、無邪気に走り回っていた世界に似て、懐かしさを感じる。また、音もたくさん書かれており、音からそのものの質感や動きまで伝わってくるので、読者はジュンという音楽家の世界に引き込まれてしまうだろう。

しかし、物語の魅力はそれだけではない。全体的にジュンと音楽家たちの交流が書かれているのだが、隙間から見え隠れする現実の存在がある。現実だけが対照的に冷たく、リアルな学校社会が書かれている。私はそこも魅力に感じており、読む際には注目してほしい。もし注目しなかったとしても、鮮やかなジュンの世界に対して現実が差し色のように描かれており、目についてしまうだろう。ジュンとトクの幸せな日常を阻もうとする現実。読んでいて、止めることができない自分をきっとじれったく感じるはずである。しかし、2 人を阻む学校社会はとても精巧に描かれており、自分の中学生の頃を思い出して胸が苦しくなる。学校で絶対的な正義であるべべ、かつてはトクと親友だったユーゴ、のんき者のキノ。周りとは違うからと見下されていたジュンとトクが関わり始めると、トクまでクラスに見離されていく。自分とは違った存在を排除し、間違っただけであっても集団になると正義が変わる。そんなおかしい常識があったなと私は振り返り、立ち向かうジュンとトクの心にあった音楽の大きさを知った。ジュンやトクのように、自分の核となるものに出会えていたなら、ユーゴたちも集団から見離されないように学校の常識にすぎることにはなかったのかもしれない。

2人は、最後に最高の歌を完成させる。怯えなどない。ジュンは音符が降ってくるようだと両腕を広げて、作曲の完成に歓喜している。「歌が始まる。音楽家たちの朝が来た。一、二、三で目覚める朝だ。」物語は最大の盛り上がりを見せて終わる。まるでこの小説自体が1つの大曲のようである。